

ガザ、人類の危機、ホモサピエンスの危機

長沢美抄子

世界は壊れている。粉々に。ガザの大量殺戮を止められない世界は正常に機能していないという証。ガザは全ての世界の矛盾を語る。それは人類の危機。そして、ガザから見た世界はあまりに非情だ。

ここに、イスラエルによる軍事攻撃が始まって1カ月後に書かれたガザの子どもたちへの一通の手紙がある。

ガザ報道と「ガザの子どもたちへの手紙」

著名な米国人ジャーナリストのクリス・ヘッジズが公表した「ガザの子どもたちへの手紙」である。一部抜粋で紹介したい。

「爆発がひっきりなしに起こっている。泣いて叫ぶしかない。母さんや父さんにしがみついて、耳をふさぐこともあるだろう。ミサイルの白い光が見えると、もうすぐ爆発するのだと待ちかまえるのだろうね。なぜ子どもたちが殺されるのだろうか？ きみたちがいったい何をしたというのだろうか？ どうして誰もきみを守ってくれないのか？ けがをして、足や腕もなくなってしまうのだろうか。目が見えなくなり、車いす生活になるのだろうか？ どうしてこの世に生まれたのだろうか？ それは何かステキなことがあるからだったの？ それとも、こういうつらいことに遭うためだったの？ 成長して大人になれるのだろうか？ 幸せになれるのかなあ？ 友だちがいなくなったらどんな感じなのだろうか？ 次に死ぬのは誰？ 母さん？ 父さん？ それとも兄弟や姉妹？ 知っている誰かが傷を負う。そして、知っている誰かが死ぬ。そのうちすぐに。」

米国人ジャーナリストのクリス・ヘッジズは、牧師でもあり、ピューリッツァー賞受賞歴もある。世界各地の戦場体験を経て、戦争をリアルでシニカルに著す

一方で、世界の民衆に対する温かい眼差しと人権を追求する正義感あふれる記事を書き続けている。安易なヒューマニズムを嫌悪する彼の誠実さと真面目さがこの手紙にも表れている。もう少し続けよう。

「私は実はね、ガザでジェット戦闘機の爆撃を受けたことがあるし、みんなが生まれる前の別のところの戦争でもいくども爆撃を受けたことがあるんだ。すごく怖かった。そのときのことは今でも夢に出てくる。ガザの写真を見るたびに、雷鳴が聞こえピカッと光ったイナズマを見て、あのときの戦争を思い出してしまう。きみたちのことを思わずにはいられなくなる。」

「世界中の記者がラファの境界線検問所に向かっている。私たちは、この虐殺を黙って見ているわけにはいかないから。(中略)この大量虐殺を止めなければならないから行く。子どもたちがいるから行く。君のような愛らしくて、罪のない、大切な子どもたちがいるから行く。みんな生きていてほしいから行くんだ。」

「いつか会えることを願っているよ。その頃君たちは大人になっていて、私は年老いているだろう。もっとも今だって君たちにとって私はもうとっくにおじいさんだろうけどね。自由で安心して暮らせていて、幸せになっている君たちに会える、そんな夢を見ているよ。」

「私たちは、君たちを失望させてしまった。これが私たちに重くのしかかる罪悪感。努力はした。けれど、十分ではなかった。私たちはラファに行く。たくさんの中間の記者たちと。私たちはガザの境界線の外側に立ち、抗議の意思を示すつもりだ。私たちは書くし、撮影もする。これは私たちがやるべきこと。大したことはできない。しかし、意味はある。そしてまたこれから、きみたちに起きたこと、起きていることを伝えていくよ。」

このクリスおじさんは、なんてあったかくて、やさしくて、まじめで涙もろいんだろう！

ガザはイスラエル侵攻の15カ月で、北から南まで更地か瓦礫の山々に変貌させられた(2024年12月現在)。どれだけの人を葬らねばならなかったのだろう。どれだけの人が瓦礫の中で息絶えたのだろう。どれだけの人が飢えて死んだのだろう。手足を失い、心を病んでしまった子どもや大人。明日は生きているだろうかと怯えながら“戦時下で”暮らしてきた人たち。遠く近くに爆撃の音、ドローンや戦闘機の音が聞こえるだけで、体が震えて止まらなくなる人たち。二度目の雨季でもある寒いこの冬、暖房も寝具も足りないテントの中で凍死する人も

大勢いる。密集したテントの生活圏で、排泄物の始末に苦勞しているに違いない女たち、高齢者たち。水の汚染は深刻である。健康な飲料水はなく、栄養バランスなど考える贅沢はない。学校も本も教科書も友だちも失い、兄弟姉妹や両親までも失ってしまった子どもたち。来る日も来る日も命の危険にさらされる避難生活、窮乏生活に疲れ果てた人たち。それでも、自分の夢と希望を持ち続けることができるのだろうか。

直接支援物資を送ることもできないこの異常なガザの“戦争”。国連の UNRWA も職員多数が殺され、批判の的となり、撤退の瀬戸際に追い詰められている。「即時停戦」「パレスチナ解放」を街頭で声を出し続けてきた世界の人も日本の人も、疲れてきている。そこで、Don't Stop Talking About Palestine! パレスチナを語ることをやめないぞ、話し続けるぞ、と声を掛け合う。いずれ世界の民衆の非難の声などそのうち消えていくさ、とイスラエルは待っているのだから。

それにしても、2023 年最後の 3 ヶ月間に比べて 2024 年のガザの報道は激減した。能登の大きな被害の向こうに、さらに凄まじく恐ろしいガザの風景がいつも重なって見えていた私などには、ガザは忘れられてしまったと言ってもよかった。能登には届けられる救援物資がガザには届かない、また、能登は戦闘機や戦車で襲撃されていない、なんていうひねくれた見方になってしまうのである。しかしいまは SNS がある。検索すれば知ることができる。ガザでは報道記者たちが意図的に殺されていたが、若い生存者たちはひるまずに発信し続けていた。世界の映画関係者のなかには、それらの発信された SNS の動画や写真を使って、ドキュメンタリー作品を作った例もある。その上映運動は草の根でいまでも裾野を広げている。

イスラエルはおとがめなし？

イスラエルのやりたい放題には言葉を失う。国際社会の規範は揺らぐ。国際司法裁判所 (ICJ) や国際刑事裁判所 (ICC) から大量殺戮であるとの判定や、勧告や命令が出されても、正義は我にあり、と居直ってきたネタニヤフ政権。反ユダヤ主義、テロリストを退治しているのだ、自衛なのだ。イスラエルの詭弁と米国の擁護にはうんざりだし、絶望的にもなる。過去に何度も国際法違反だと訴えられてきた戦争犯罪も、入植地拡大も、人権侵害も、なんのその。しかしこれは 21 世紀史上最悪の大量殺戮。ジェノサイドである。目を逸らしてはいけない。しかしそれでも、イスラエルは特別らしい。結局、例によって、おとがめなしな

のだろうか。インピュニティ (impunity) とはこのこと。だが、この戦争犯罪は無罪放免とはいかないだろうと思う。

ここで特記しておきたいのは、インピュニティを許すまいと立ちはだかる法の番人、国際機関で重積を担う3人の女性たちのこと。国連の威信と信頼を取り戻すために努力する国連事務次長の中満泉氏、国際法とパレスチナの現実を熟知する頼もしき国連パレスチナ占領地特別報告官のフランチェスカ・アルバネーゼ氏、公正で冷静な判断をする国際刑事裁判所 (ICC) の赤根智子所長。こんなに女性の法律家というのは公正で強くてしかも揺るがない信念と勇気があるのかと、心奪われている昨今である。

誰が殺され、何が壊されたのか？

イスラエルが一番憎むのは、黙らせることができないガザの目障りな人々。真っ先に殺害された人々の名前や職業を知れば、それがわかる。ガザの封鎖と人権のない現実を世界に知らせる人々、抵抗闘争をやめない人々、未来の可能性を持つ才能。世界トップレベルの IT 技術を持つ若い有望な人材、詩人、芸術家、報道記者、医療関係者、学術研究者、教育者たちも集中的に殺された。大学も病院も全部破壊される。歴史的文化遺産、芸術文化を消し去られた。過去も未来も奪われていく。2024 年末までに少なくとも 201 名のジャーナリストが殺されたという。史上に記録がない記者の殺害人数。命を奪われた人の数は 12 月末で 4 万 5 千人と公表されるが、ガッサン・アブー・シッター医師によれば、本当はおよそ 30 万人。戦争前のガザの総人口の 10~12% にのぼる。死んだパレスチナ人はこうして数字になってしまう。

ガザの惨状を SNS で発信するガザの人々は、もう一方で、人々がいかに生きる喜びを大切にしているかを伝える姿も伝える。瓦礫に囲まれた空き地で子どもたちと若者がダブケ (パレスチナの民族ダンス) に興じ、カッコ良さを競うように踊る動画に誰もが慰められ、ホッとする。弦楽器ウードの演奏を聴きに集まるテントの中のライブハウスには自分もいる様な気になる。そこには愛が満ちている。悲しくなるほど。

子どもたちが一緒に絵を描くテントの中の絵画教室。先生は、2019 年に奇跡的な来日を果たしたガザの 3 人の画家の一人、ラエド・イーサ氏。彼の家族はなんとか 4 月にエジプトに脱出できたが、彼だけは出国を (イスラエル兵によっ

て) 拒絶された。以来、家族と切り離されてのテント生活なのだが、テント村の子どもたちに絵を描かせ、その生命力の回復を助けてきた。限りある絵の具は子どもたちに与え、自分は木を燃やしてできた煤の墨とコーヒー、紅茶、赤いハイビスカス茶で絵を描く。紙を選ぶ贅沢はそこにはない。テントでの結婚式や母娘の睦まじい姿を描いた絵もあれば、死んだ子どもたちが風船にぶら下がって天空へと舞い上がっていく絵や、道に横たわる亡骸を野良犬が噛みついている絵なども..そこにラエドの涙が見える。

ガザの外側と内側がつながる手段として SNS は欠かせなくなった。ガザの封鎖は 18 年前に始まったから、狭いガザしか知らないままに成人した子どもも多い。彼らはケータイの中で世界を見つめている。私たちがケータイの中でガザを見つめている。電車の中でケータイを見ている乗客たちは何を見ているのだろう。一人ひとりの世界がケータイの中にある。電車の中では人と人はつながらないが、ひょっとしてガザを通して電車の乗客もつながっていたりするかもしれない。

10・7を引き起こしたもの 挫折した非暴力解放運動

あのガザからの奇襲攻撃は蓄積された「憎悪」が招いたとも言われる。「非難」の合唱に比べれば、これは良心的な解釈。しかし、問題を孕んでいる。

「憎悪に根ざした犯行」という解釈ではハマスだけでなく、ガザの民衆の本当の願いも、彼らの平和的抵抗も見落とされてしまう。それに問題の根っこがイスラエルという国を成立させる「シオニズム」とそこに内在する民族浄化、「アパルトヘイト」という問題の本質から目を逸らさせる。

10月7日のハマスを中心とするガザの統一戦線による決起は「第三次インテリファード」とも言える民衆蜂起であった。「アル＝アクサ洪水作戦」と名づけられたこの民衆蜂起の“リアル”には、いくつもの証言がある。ここではこれについて深く入らないが、音楽祭は予想していなかったため想定外の混乱が生じたとの証言もある。民間人の攻撃は計画になかったばかりか、禁じられていたとも。しかし残念ながら、あの奇襲攻撃にはイスラエル側からの意図的なフェイクが加わり、“残忍なハマスの攻撃”が強調され、検証されないままに非難が集中するように仕向けられた。そうした世論操作に初めから違和感を抱いた人は実際に少なくなかったと思う。客観的で公正な検証が必要である。

ガザの民衆の非暴力抵抗運動の事実を確認しよう。2018年3月30日の「土地の日」に始まり2019年末まで1年9ヶ月間続いた「帰還の大打進（Great Return March）」のことである。それは、毎週金曜日に行われた正真正銘の、封鎖解除をねがう非暴力解放運動であった。自由と平和を求めるデモでもあった。ガザ東部の壁、境界線まで大勢の民衆が歩き、壁の外を囲むイスラエル兵たちに向かって「封鎖を解き、故郷に帰還させてくれ」と訴えてきた。奪って領土としてしまったイスラエル人（兵）にとって、認められるわけがないとわかっているにもかかわらず続けた。撃たれるかもしれないとわかっているにもかかわらず毎週行進した。しかしイスラエル軍は容赦なく、催涙弾と実弾狙撃で応じた。犠牲者が続出し、子どもを含む200人以上が殺害され、36,000人以上が負傷した。「帰還の大打進」は失敗に終わった。封鎖されたままの現状を全く変えられなかった。世界からの積極的な支持も注目も得られなかった。

その「帰還の大打進」の生みの親はヤヒヤ・シンワル氏であった。2024年10月16日にガザ南部で殺されたハマスのトップリーダー（ガザ地区政治局長、暗殺されたハマス政治局長のハニヤ氏の後任）で、イスラエルと米国が血眼に探していた“テロリスト”である。残忍な殺し屋的イメージをつけられてしまっていたシンワル氏であるが、それを覆すほどの指導層や民衆からの支持と信頼を見ると、コワモテのイメージだけで見るのは危険だと思う。10・7の「アル＝アクサ洪水作戦」を計画し指揮した人物としてよく語られているが、非暴力主義者だったことを知る人は少ない。シンワル氏は長期停戦の枠組みの中で封鎖解除についての協議をイスラエル政府に幾度となく呼びかけてきた政治家であった。が、完全に無視された。（この証言は、ハマスの指導部に詳しい現地の専門家から聞いたことを根拠にしている。）直接苦い思いを噛み締めたハマスの指導者たちを武力闘争へと向かわせたのは、この挫折感、閉塞感、屈辱感だった。

2024年に見出された希望

ガザが失ったものをあげればキリがない。しかし、2024年を振り返ると、明るい希望となりえる変化がいくつもあった。

（1）世界のBDS運動が活発になった。日本では伊藤忠アビエーションと日本エヤークラフトサプライがイスラエルのエルビット・システムズとの協力覚書を破棄した。これを世界が注目し称賛した。今はイスラエルの軍事・入植ビ

ビジネス企業に投資されている日本の年金を（ノルウェーの例のように）引き上げさせることを一つの目標としている。

2) ICCがネタニヤフ首相に逮捕状を発行した。

3) 2024年春、世界中の学生たちが、大学による大量虐殺と戦争への投資に異議を唱えるため、野営地を設営して抗議の意思を示した。

4) 中南米諸国の中で、イスラエル非難を鮮明にする国々が増えた。

5) パレスチナの国連加盟は実現できなかったが、パレスチナへの国連総会における新たな権利付与等に係る総会決議が採択された。これによって、パレスチナの国連の中での地位が昇格した。

カーター元米大統領を追悼する

2024年のプラスの成果として5項目あげたが、振り返っていたそのとき、12月29日に100歳のジミー・カーター元大統領（1924年生まれ）の訃報が入った。パレスチナ問題の関わりで特別の位置を占める人だから、ここに一言挿入するのは違和感もあるのだが、許してほしい。

カーター元大統領（任期1977年1月20日—1981年1月20日）が犯した間違いはいくつもあるが、大統領職を退いた後のカーター氏は真剣に人権外交に取り組んだ。1982年に創設したカーター・センターを活動拠点に、世界の貧者のための福祉活動、平和外交、人権外交に力を注いだ。そして多くの足跡を残した。平和のための外交に果敢に挑んだ中でも特に評価されるのは、パレスチナ問題へのコミットである。

イスラエルの対パレスチナ人政策が「アパルトヘイト」であると確信し、大胆にもその言葉を著書のタイトルに使った。『カーター、パレスチナを語る—アパルトヘイトではなく平和を』2006年刊（原題はPalestine Peace Not Apartheid）。アパルトヘイトという言葉がイスラエル批判に絡ませることで、パレスチナ問題の認識を大きく前進させ道を切り開いた。米国の政治の中で最大のタブーでもあったイスラエル批判を、タブーにさせない空気作りの先陣を切った。カーター氏への攻撃と反発の風圧はすさまじかった。この本の出版によってカーター氏は孤立させられたが、ひるまなかった。タブーを打ち破った彼の功績は大きい。ガザのジェノサイドのことをどこまで知らされていたかわからないが、きっと心残りのままに息を引き取ったのだろうと思う。

谷川俊太郎の遺した言葉

『おばあちゃんの白い鳥～ガザのものがたり』（講談社）が9月に発刊された。ガザの女の子マラク・マタールさんが2014年夏のイスラエルによる攻撃の時の体験を描いた絵本である。筆者はこれに関わり、短い解説文を寄せた。43年前の絵本『さかなはおよぐ』（すばる書房、ヒルミー・トゥニイ・絵、ハサン・アブダッラー・文、ぬたはらのぶあき・訳）に次ぐ2冊目のパレスチナ絵本である。翻訳者がさくまゆみこさんに決まる前、実は谷川俊太郎さんに訳のおねがいをしたが、「体調が極めて悪いので、引き受けることができません」という谷川さんの返事で断念した。発刊の2カ月後、谷川俊太郎さんは旅立った。

谷川俊太郎さんの追悼番組の一つとして、師走にNコンの合唱曲の4曲の詩をめぐる番組が放映された。そのうちの2022年の『とどいていますか』と2010年の『いのち』の二つの詩に、「ホモサピエンス」という言葉があることに気づいた。「わたしたち ホモサピエンス」と「ホモサピエンスであるより先にヒトもひとつの無名のいのち」というフレーズである。その同義語とも言えるヒト、そしてその「命」が詩人の世界観の根幹にあると理解される。谷川さんは、命の多様性も大事であるとも語る。われわれも、ガザの子どもも、イスラエルの子らも、みんなホモサピエンスなのだよと聞こえてくる。「生きとし生けるもののふるさと地球は生きていのち育む」（『いのち』）というフレーズに、ガザの「ホロコースト」と瓦礫を思い浮かべる。

ジェニンの暗闇から

いま、西岸の抵抗運動の最前線として知られるジェニンでは、イスラエル占領軍が武力弾圧を強めている。ジェニンの「自由劇場」を率いてきたアフマド・トゥバーシ氏を、福岡市文化芸術振興財団の助成を受けたアーティスト団体が、9月に招聘した。トゥバーシ氏は福岡の高校で演技指導や、公開講演やテレビ局や雑誌のインタビューをこなし、文化交流を終えて日本を去った。そのまま次の招聘先を駆け巡り、故郷に戻るとすぐに、ジェニンの苛酷な状況をSNSで伝えてきた。ジェニンは電気も水も止められ、銃撃が絶えない、と。今年に入り、西岸全域でこの軍事侵攻が広がっている。

今回のガザの停戦合意は歓迎したいが、根本的解決への道は導くものではない。現在、約1万3千人のパレスチナ人の囚人（捕虜）が獄中で虐待されてい

ることも忘れるわけにはいかない。1月末に3人のイスラエル人女性兵士の人質が解放されたその日、90人のパレスチナ人が釈放されたが、西岸のカルキリヤのモスクで祈るパレスチナ人60人が投獄された。

ガザの屍と瓦礫の上に、イスラエルはネタニヤフ構想「ガザ2035」を実現させていこうとしている。入植地であふれかえる西岸もガザと同じ運命なのだろうか。「川から海まで」、ヨルダン川から地中海まで、ホモサピエンスが豊かに生存できる大地を取り戻す国づくりはいつ始められるのだろうか。

*追記：「鉄の壁」作戦と称し、1月21日に始まったジェニン包囲攻撃から34日目の2月23日にはとうとうイスラエル軍の戦車がジェニンに侵攻を開始し、さらに増派している。2002年の「防衛の盾」作戦以来の大規模な侵攻である。

このエッセイは、『詩人会議』2025年3月号掲載の「ガザ、ホモ・サピエンスの危機」に加筆修正したものです。